

3章 精神保健への影響

相川 勝代

1節 子どもの不安

1. はじめに

雲仙・普賢岳の噴火災害は43人（調査当時）もの尊い命を犠牲にし、校舎や父祖伝来の家屋敷や田畑あるいは大事なもち物を自然の猛威の中にのみこんだ。悲しみや苦痛のいえる間もなく、多くの子どもたちが家族と共に、あるいは家族と別れ、転々とした長期の避難生活をしいられることになった。一家の大黒柱であり、わが子の成長を楽しみにしていた父親をなくした子どももいる。通学や仕事のために家族が別れて住むようになった子どももいる。

半島に住む人々の生活と調和した、緑豊かな山容にいいだかれて育った子どもたちの目の前には、それまでの雲仙・普賢岳からは想像もできない荒々しい山肌が一望される。土石流のために押し流された家や、河川を埋めつくし、田畑や道路に堆積したままの土石の膨大さは自然の力の強大さを見せつける。1991年6月3日の大規模火砕流とその後も頻発する大小の火砕流や土石流は危険地域の人々を不安におとし入れ、うちのめし続けている。

そういうきびしい状況の中でも、子どもたちはけなげに生き、たくましく成長しているかにみえる。しかし、先の見通しのたたない、長期におよぶ噴火災害下での子どもたちの健康障害がなににもまして心配なことである。思いもかけない突発的な危機に遭遇し、身近な人をなくし、なれ親しんだ自然を失い、新しい適応をせまられ続けている子どもたちの実態を、アンケートと児童用顕在性不安検査（CMA S）を用いて調査したので報告する。

2. 調査の方法

調査は1992年秋に実施した。実施期間は調査対象校の学校行事等により、1992年9月21日から同年11月2日にかけてである。調査対象は島原市内の小学校3校、中学校2校、深江町の小学校3校、中学校1校の計9校である。調査対象のうち島原第5小学校と島原第3中学校は、仮設校舎から本校舎にもどっ

て間もない時期であった。対象学年は小学4年から中学3年までの在籍児童・生徒全員とした。調査対象児童総数は1230人（男622人，女608人），生徒数は1272人（男678人，女594人），全対象児童・生徒総数は2502人である。回収率95.6%，有効回答率99.1%であった。

調査は Raphael（1986）および長崎大学医学部竹本（1992）の「普賢岳噴火災害による学童の生活変化と健康影響について」を参考にして作成したアンケートおよび Castaneda と坂本による「児童用顕在性不安検査（CMAS）」を施行した。

児童用顕在性不安検査（CMAS：Children's Manifest Anxiety Scale）の得点分布は次のようになっている。得点範囲が0～5の時「非常に低い不安」，6～12の時「低い不安」，13～20の時「正常」，21～28の時「高い不安」，29以上の時「非常に高い不安」。？得点は「無応答を含んで8以上信頼性がない」とされ，L得点（Lie-Scale）は0～3は「妥当性あり」，4～6は「妥当性ややあり」，7以上は「妥当性なし」とされている。

調査結果は，個人資料として整理し，1992年12月，各学校に提出した。資料をもとに校長，教頭，保健主事，担任教諭等と精神保健の立場から，児童・生徒理解および指導のための話し合いを持った。

総計学的解析には，T検定及び分散分析を用いた。

3. 結果の概要

(1) 不安得点の比較—性別・学年別・学校別—

全体の？得点の平均値は3.3，L得点の平均値は1.6であった。

全体の不安得点の平均値15.9であった。男子14.7，女子17.2で，男子より女子が有意（ $P < 0.05$ ，T-test）に高かった。

小学校の不安得点の平均値は16.1，中学校の不安得点の平均値は15.7で，小学校と中学校の間には有意差はなかったが，小学校および中学校とも女子の不安得点が男子よりも有意（ $P < 0.05$ ，T-test）に高かった。

学年別の不安得点の平均値は，小学4年16.5，5年16.7，6年15.0，中学1年14.1，2年16.0，3年16.9で，中学3年がもっとも高く，中学1年がもっとも低かった。小学4年，5年，中学2年，3年に対して中学1年は有意（ $P < 0.05$ ，ANOVA）に低かった。

3章 精神保健への影響

表1-1 災害体験の実態—全体および性別—

実数(%)

		男	女	計
住居	自分の家	1003(77.2)	965(80.3)	1,968(78.7)
	仮設住宅	139(10.7)	127(10.6)	266(10.6)
	その他	149(11.5)	108(9.0)	257(10.3)
危険	感じる	416(32.0)	460(38.3)	876(35.0)
	感じない	877(67.5)	736(61.2)	1,613(64.5)
危険の種類別	噴火	80(6.2)	72(6.0)	152(6.1)
	火砕流	190(14.6)	215(17.9)	405(16.2)
	土石流	78(6.0)	89(7.4)	167(6.7)
	降灰	133(10.2)	163(13.6)	296(11.8)
	その他	26(2.0)	20(1.7)	46(1.8)
身近な人の死	あり	101(7.8)	131(10.9)	232(9.3)
	なし	1,172(90.2)	1,048(87.2)	2,220(88.7)
なくなった人	父	4(0.3)	2(0.2)	6(0.2)
	母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	きょうだい	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	祖父母	1(0.1)	0(0.0)	1(0.0)
	その他	96(7.4)	131(10.9)	227(9.1)
大事なもの	失った	188(14.5)	134(11.1)	322(12.9)
	失ってない	1,106(85.1)	1,067(88.8)	2,173(86.9)
失ったもの	家	57(4.4)	38(3.2)	95(9.8)
	自分の持ち物	92(7.1)	66(5.5)	158(6.3)
	田畑	84(6.5)	61(5.1)	145(5.8)
	その他	21(1.6)	18(1.5)	39(1.6)
別れて住むようになった家族	あり	111(8.5)	113(9.4)	224(9.0)
	なし	1,143(87.9)	1,042(86.7)	2,185(87.3)
別	父	18(1.4)	20(1.7)	38(1.5)
	母	8(0.6)	10(0.8)	18(0.7)

		男	女	計
別の家族	きょうだい	15(1.2)	28(2.3)	43(1.7)
	祖父母	75(5.8)	74(6.2)	149(6.0)
	その他	7(0.5)	10(0.8)	17(0.7)
別居の理由	家が狭いため	40(3.1)	38(3.2)	78(3.1)
	仕事のため	28(2.2)	23(1.9)	51(2.0)
	通学のため	12(0.9)	19(1.6)	31(1.2)
	その他	25(1.9)	38(3.2)	63(2.5)
家族の仕事の変化	あり	209(16.1)	196(16.3)	405(16.2)
	なし	1,085(83.5)	1,005(83.6)	2,090(83.5)
家族の仕事	父の仕事が変わった	87(6.7)	87(7.2)	174(7.0)
	母の仕事が変わった	110(8.5)	102(8.5)	212(8.5)
	母が仕事を始めた	37(2.8)	30(2.5)	67(2.7)
	その他	17(1.3)	21(1.7)	38(1.5)

各学年の男女間の不安得点の平均値は、小学4年ではほとんど差がなかったが、5年になると男女差がみられ、6年で男女差が大きくなり、中学では3学年とも男女差がみられたが、すべての学年で女子の不安得点が男子より高かった。

各学校の不安得点の平均値は、大野木場小学校（以下、大野木場小とする）16.4、小林小学校（小林小）16.1、深江小学校（深江小）16.1、島原第3小学校（3小）15.5、島原第4小学校（4小）15.0、島原第5小学校（5小）17.3であった。小学校では5小がもっとも高く、4小がもっとも低かったが、各学校間に有意差はなかった。深江中学校（深江中）17.4、島原第2中学校（2中）15.4、島原第3中学校（3中）14.6であった。3中は深江中および5小よりも有意（ $P < 0.05$, ANOVA）に低かった。

(2) 災害体験の実態

① 全体および性別（表1-1）

仮設住宅に住んでいる者の割合は全体の10.6%で男女ほぼ同率であった。「その他」（噴火災害のため借家やアパートなどに住んでいる者）が10.3%で

表1-2 災害体験の実態—学年別—

実数(%)

	小 学 校				中 学 校				
	4 年	5 年	6 年	計	1 年	2 年	3 年	計	
住 居	自分の家	290(73.8)	354(80.5)	317(79.8)	961(78.1)	324(79.6)	331(79.0)	352(78.9)	1,007(79.2)
	仮設住宅	50(12.7)	44(10.0)	44(11.1)	138(11.2)	36(8.8)	45(10.7)	47(10.5)	128(10.1)
	その他	52(13.2)	42(9.5)	36(9.1)	130(10.6)	45(11.1)	35(8.4)	47(10.5)	127(10.0)
危 険	感じる	167(42.5)	220(50.0)	134(33.8)	521(42.4)	128(31.4)	104(24.8)	123(27.6)	355(27.9)
	感じない	226(57.5)	218(49.5)	263(66.2)	707(57.5)	278(68.3)	307(73.3)	321(72.0)	906(71.2)
危 険 の 種 別	噴 火	29(7.4)	47(10.7)	10(2.5)	86(7.0)	21(5.2)	19(4.5)	26(5.8)	66(5.2)
	火 砕 流	52(13.2)	111(25.2)	66(16.6)	229(18.6)	72(17.7)	37(8.8)	67(15.0)	176(13.8)
	土 石 流	30(7.6)	65(14.8)	28(7.1)	123(10.0)	11(2.7)	15(3.6)	18(4.0)	44(3.5)
	降 灰	62(15.8)	87(19.8)	46(11.6)	195(15.9)	31(7.6)	39(9.3)	31(7.0)	101(7.9)
	その他	4(1.0)	18(4.1)	10(2.5)	32(2.6)	6(1.5)	4(1.0)	4(0.9)	14(1.1)
身 近 な 人 の 死	あり	26(6.6)	42(9.5)	39(9.8)	107(8.7)	41(10.1)	41(9.8)	43(9.6)	125(9.8)
	なし	355(90.3)	384(87.3)	352(88.7)	1,091(88.7)	360(88.5)	371(88.5)	398(89.2)	1,129(88.8)
な く な っ た	父	1(0.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.1)	3(0.7)	1(0.2)	1(0.2)	5(0.4)
	母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	きょうだい	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	祖 父 母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.2)	1(0.1)

		小 学 校					中 学 校		
		4 年	5 年	6 年	計	1 年	2 年	3 年	計
人	そ の 他	25(6.4)	42(9.5)	39(9.8)	106(8.6)	39(9.6)	40(9.5)	41(9.2)	121(9.5)
	失った 大事な物	64(16.3)	62(14.1)	56(14.1)	182(14.8)	43(10.6)	42(10.0)	55(12.3)	140(11.0)
	失っていない	329(83.7)	378(85.9)	341(85.9)	1,048(85.2)	363(89.2)	371(88.5)	391(87.7)	1,125(88.4)
失ったもの	家	15(3.8)	16(3.6)	17(4.3)	48(3.9)	18(4.4)	11(2.6)	18(4.0)	47(3.7)
	自分の持ち物	35(8.9)	39(8.9)	32(8.1)	106(8.6)	20(4.9)	11(2.6)	21(4.7)	52(4.1)
田畑	畑	23(5.9)	32(7.3)	24(6.0)	79(6.4)	22(5.4)	25(6.0)	19(4.3)	66(5.2)
	その他	5(1.3)	11(2.5)	5(1.3)	21(1.7)	4(1.0)	3(0.7)	11(2.5)	18(1.4)
別れて住むようになった家族	あり	39(9.9)	32(7.3)	39(9.8)	110(8.9)	41(10.1)	31(7.4)	42(9.4)	114(9.0)
	なし	333(84.7)	390(88.6)	346(87.1)	1,069(86.9)	356(87.5)	371(88.5)	389(87.2)	1,116(87.7)
別れて住むようになった家族	父	9(2.3)	7(1.6)	10(2.5)	26(2.1)	5(1.2)	5(1.2)	2(0.4)	12(0.9)
	母	4(1.0)	1(0.2)	6(1.5)	11(0.9)	4(1.0)	2(0.5)	1(0.2)	7(0.6)
ようになっ た家族	きょうだい	4(1.0)	1(0.2)	12(3.0)	17(1.4)	3(0.7)	9(2.1)	14(3.1)	26(2.0)
	祖父	31(7.9)	21(4.8)	22(5.5)	74(6.0)	27(6.6)	20(0.5)	28(6.3)	75(5.9)
別居の家族	その他	2(0.5)	5(1.1)	4(1.0)	11(0.9)	4(1.0)	0(0.0)	2(0.4)	6(0.5)
	家が狭いため	15(3.8)	12(2.7)	11(2.8)	38(3.1)	17(4.2)	9(2.1)	14(3.1)	40(3.1)
通学の家族	仕事のため	5(1.3)	11(2.5)	11(2.8)	27(2.2)	10(2.5)	6(1.4)	8(1.8)	24(1.9)
	その他	3(0.8)	3(0.7)	7(1.8)	13(1.1)	2(0.5)	7(1.7)	9(2.0)	18(1.4)
	その他	13(3.3)	7(1.6)	12(3.0)	32(2.6)	10(2.5)	9(2.1)	12(2.7)	31(2.4)

		小 学 校				中 学 校			
		4 年	5 年	6 年	計	1 年	2 年	3 年	計
家族の仕事 の変化	あ り	74(18.8)	68(15.5)	73(18.4)	215(17.5)	61(15.0)	69(16.5)	60(13.4)	190(14.9)
	な し	319(81.2)	372(84.6)	324(81.6)	1,015(82.5)	345(84.8)	344(82.1)	386(86.6)	1,075(84.5)
家 族 の 仕 事	父の仕事が変わった	30(7.6)	26(5.9)	29(7.3)	85(6.9)	29(7.1)	36(8.6)	24(5.4)	89(7.0)
	母の仕事が変わった	41(10.4)	40(9.1)	38(9.6)	119(9.7)	29(7.1)	35(8.4)	29(6.5)	93(7.3)
	母が仕事を始めた	14(3.6)	11(2.5)	11(2.8)	36(2.9)	9(2.2)	10(2.4)	12(2.7)	31(2.4)
	そ の 他	8(2.0)	3(0.7)	10(2.5)	21(1.7)	4(1.0)	7(1.7)	6(1.3)	17(1.3)

あった。危険性を感じる者は全体で35.0%，女子が少し高率であった。身近な人をなくした者は男子7.8%，女子10.9%であった。父をなくしたのは男子4人，女子2人であった。大事なものを失った者は12.9%，家族が別れて住むようになった者は9.0%，家族の仕事が変化した者は16.2%で性差はみられなかった。

② 学 年 別 (表1-2)

仮設住宅に住んでいる者および「その他」はそれぞれ10%前後で学年差はなかった。危険性を感じる者は小学5年が50.0%，4年が42.5%で，おおむね学年が上がるにつれ減少する傾向にあり，もっとも低いのは中学2年であった。噴火，火砕流，土石流，降灰のすべてに対して，小学5年が危険性を感じている者が多かった。身近な人をなくした者，大事なものを失った者，家族が別れて住むようになった者，家族の仕事が変化した者の割合は学年別で特異的なものはなかった。父をなくした者は小学4年1人，中学1年3人，中学2年1人，中学3年1人であった。

③ 学 校 別

a. 小学校 (表1-3)

仮設住宅に住んでいる者は，大野木場小では75.4%で，4人に3人という高い割合であった。5小20.7%，4小7.3%，深江小2.8%の者が仮設住宅に住んでいた。「その他」に住んでいる者は，5小20.7%，大野木場小11.6%であった。

危険性を感じる者は，小林小67.0%，深江小，大野木場小，5小の順であった。危険性の種別は学校により特徴がみられた。

身近な人をなくした者は，5小17.9%がもっとも多く，次に多いのが大野木場小であった。父をなくした者が5小に1人いた。大事なものを失った者は，大野木場小76.8%と高率であった。

家族が別れて住むようになった者は大野木場小21.7%，家族の仕事が変化した者も大野木場小52.2%でもっとも多かった。

b. 中 学 校 (表1-4)

仮設住宅に住んでいる者は，深江中14.8%，3中18.9%であった。3中では19.4%の者が「その他」に住んでおり，避難生活をしている者が4割にも上っ

表1-3 災害体験の実態—小学校—

実数(%)

		小 学 校						
		大野木場	小 林	深 江	島原第三	島原第四	島原第五	計
住居	自 分 の 家	9(13.0)	92(97.9)	198(92.5)	318(92.2)	150(83.8)	194(59.0)	961(78.1)
	仮 設 住 宅	52(75.4)	0(0.0)	6(2.8)	0(0.0)	13(7.3)	67(20.4)	138(11.2)
	そ の 他	8(11.6)	2(2.1)	9(4.2)	27(7.8)	16(8.9)	68(20.7)	130(10.6)
危 険	感 じ る	41(59.4)	63(67.0)	142(66.4)	70(20.3)	39(21.8)	166(50.5)	521(42.4)
	感 じ ない	28(40.6)	31(33.0)	71(33.2)	274(79.4)	140(78.2)	163(49.5)	707(57.5)
危 険 の 種 別	噴 火	6(8.7)	3(3.2)	9(4.2)	16(4.6)	11(6.1)	41(12.5)	86(7.0)
	火 砕 流	34(49.3)	36(38.3)	52(24.3)	28(8.1)	14(7.8)	65(19.8)	229(18.6)
	土 石 流	4(5.8)	8(8.5)	23(10.7)	10(2.9)	7(3.9)	71(21.6)	123(10.0)
	降 灰	9(13.0)	22(23.4)	106(49.5)	13(3.8)	8(4.5)	37(11.2)	195(15.9)
	そ の 他	0(0.0)	0(0.0)	6(2.8)	6(1.7)	0(0.0)	20(6.1)	32(2.6)
身近な人の死	あ り	9(13.0)	10(10.6)	7(3.3)	6(1.7)	16(8.9)	59(17.9)	107(8.7)
	な し	57(82.6)	84(89.4)	205(95.8)	327(94.8)	156(87.2)	262(79.6)	1,091(88.7)
な く な っ た	父	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.3)	1(0.1)
	母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	き ょ う だ い	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	祖 父 母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

		小 学 校										計
		大野木場	小	林	深	江	島原第三	島原第四	島原第五	計		
人	他の	9(13.6)	10(10.6)		7(3.3)	6(1.7)	16(8.9)	58(17.6)	106(8.6)			
	失った	53(76.8)	1(1.1)		11(5.1)	5(1.4)	7(3.9)	105(31.9)	182(14.8)			
大事なもの	失っていない	16(23.2)	93(98.9)		203(94.9)	340(98.6)	172(96.1)	224(68.1)	1,048(85.2)			
	家	12(17.4)	0(0.0)		0(0.0)	0(0.0)	5(2.8)	31(9.4)	48(3.9)			
失ったもの	自分の持ち物	50(72.5)	1(1.1)		7(3.3)	2(0.6)	0(0.0)	46(14.0)	106(8.6)			
	畑	17(24.6)	0(0.0)		2(0.9)	2(0.6)	1(0.6)	57(17.3)	79(6.4)			
別れて住むようになった家族	他の	6(8.7)	0(0.0)		2(0.9)	1(0.3)	2(1.1)	10(3.0)	21(1.7)			
	あり	15(21.7)	2(2.1)		29(13.6)	6(1.7)	15(8.4)	43(13.1)	110(8.9)			
別れて住むようになった家族	なし	53(76.8)	84(89.4)		181(84.6)	328(95.1)	149(83.2)	274(83.3)	1,069(86.9)			
	父	7(10.1)	1(1.1)		11(5.1)	1(0.3)	2(1.1)	4(1.2)	26(2.1)			
別れて住むようになった家族	母	1(1.4)	0(0.0)		9(4.2)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.3)	11(0.9)			
	きょうだい	3(4.3)	0(0.0)		8(3.7)	0(0.0)	4(2.2)	2(0.6)	17(1.4)			
別居の家族	祖父	10(14.5)	0(0.0)		14(6.5)	4(1.2)	11(6.1)	35(10.6)	74(6.0)			
	その他	2(2.9)	0(0.0)		5(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	4(1.2)	11(0.9)			
別居の家族	家が狭いため	8(11.6)	0(0.0)		7(3.3)	0(0.0)	4(2.2)	19(5.8)	38(3.1)			
	仕事のため	6(8.7)	1(1.1)		10(4.7)	2(0.6)	1(0.6)	7(2.1)	27(2.2)			
別居の家族	通学のため	2(2.9)	0(0.0)		4(1.9)	0(0.0)	3(1.7)	4(1.2)	13(1.1)			
	その他の	2(2.9)	0(0.0)		8(3.7)	3(0.9)	5(2.8)	14(4.3)	32(2.6)			

		小 学 校						
		大野木場	小 林	深 江	島原第三	島原第四	島原第五	計
家族の仕事の 変化	あ り	36(52.2)	8(8.5)	33(15.4)	27(7.8)	13(7.3)	98(29.8)	215(17.5)
	な し	33(47.8)	86(91.5)	181(84.6)	318(92.2)	166(92.7)	231(70.2)	1,015(82.5)
家 族 の 仕 事	父の仕事が変わった	12(17.4)	2(2.1)	10(4.7)	10(2.9)	6(3.4)	45(13.7)	85(6.9)
	母の仕事が変わった	30(43.4)	5(5.3)	12(5.6)	10(2.9)	6(3.4)	56(17.0)	119(9.7)
	母が仕事を始めた	4(5.8)	1(1.1)	12(5.6)	5(1.4)	1(0.6)	13(4.0)	36(2.9)
	そ の 他	2(2.9)	0(0.0)	3(1.4)	4(1.2)	1(0.6)	11(3.3)	21(1.7)

表1-4 災害体験の実態—中学校—

実数(%)

		中 学 校			
		深 江	島 原 第 二	島 原 第 三	計
住 居	自 分 の 家	285(78.1)	486(94.2)	236(60.4)	1,007(79.2)
	仮 設 住 宅	54(14.8)	0(0.0)	74(18.9)	128(10.1)
	そ の 他	24(6.6)	27(5.2)	76(19.4)	127(10.0)
危 険	感 じ る	156(42.7)	97(18.8)	102(26.1)	355(27.9)
	感 じ な い	208(57.0)	416(80.6)	282(72.1)	906(71.2)
危 険 の 種 別	噴 火	16(4.4)	33(6.4)	17(4.3)	66(5.2)
	火 砕 流	98(26.8)	27(5.2)	51(13.0)	176(13.8)
	土 石 流	18(4.9)	4(0.8)	22(5.6)	44(3.5)
	降 灰	47(12.9)	37(7.2)	17(4.3)	101(7.9)
	そ の 他	1(0.3)	6(1.2)	7(1.8)	14(1.1)
身近な人の死	あ り	31(8.5)	25(4.8)	69(17.6)	125(9.8)
	な し	329(90.1)	485(94.0)	315(80.6)	1,129(88.8)
な く な っ た 人	父	0(0.0)	0(0.0)	5(1.3)	5(0.4)
	母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	き ょ う だ い	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	祖 父 母	1(0.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.1)
	そ の 他	31(8.5)	25(4.8)	65(16.6)	121(9.5)
大事なもの	失 っ た	37(10.1)	8(1.6)	95(24.3)	140(11.0)
	失 っ て な い	328(89.9)	505(97.9)	292(74.7)	1,125(88.4)
失 っ た も の	家	8(2.2)	1(0.2)	38(9.8)	47(3.7)
	自 分 の 持 ち 物	14(3.8)	1(0.2)	37(9.5)	52(4.1)
	田 畑	12(3.3)	2(0.4)	52(13.3)	66(5.2)
	そ の 他	8(2.2)	5(1.0)	5(1.3)	18(1.4)
別れて住むよ うになった家 族	あ り	43(11.8)	15(2.9)	56(14.3)	114(9.0)
	な し	309(84.7)	488(94.6)	319(81.6)	1,116(87.7)
別	父	4(1.1)	3(0.6)	5(1.3)	12(0.9)

3章 精神保健への影響

		中 学 校			
		深 江	島 原 第 三	島 原 第 四	計
別の家族	母	1(0.3)	4(0.8)	2(0.5)	7(0.6)
	きょうだい	15(4.1)	5(1.0)	6(1.5)	26(2.0)
	祖 父 母	27(7.4)	5(1.0)	43(11.0)	75(5.9)
	そ の 他	2(0.5)	0(0.0)	4(1.0)	6(0.5)
別居の理由	家が狭いため	10(2.7)	1(0.2)	29(7.4)	40(3.1)
	仕事のため	9(2.5)	7(1.4)	8(2.0)	24(1.9)
	通学のため	14(3.8)	0(0.0)	4(1.0)	18(1.4)
	そ の 他	10(2.7)	5(1.0)	16(4.1)	31(2.4)
家族の仕事の変化	あ り	75(20.5)	30(5.8)	85(21.7)	190(14.9)
	な し	290(79.5)	483(93.6)	302(77.2)	1,075(84.5)
家族の仕事	父の仕事が変わった	35(9.6)	14(2.7)	40(10.2)	89(7.0)
	母の仕事が変わった	34(9.3)	13(2.5)	46(11.8)	93(7.3)
	母が仕事を始めた	8(2.2)	2(0.4)	21(5.4)	31(2.4)
	そ の 他	11(3.0)	3(0.6)	3(0.8)	17(1.3)

ていた。

危険性を感じる者は、深江中42.7%で3中より多かった。危険性の種別として、火砕流と降灰に対しては深江中が高く、土石流に対しては3中の割合が高かった。

身近な人をなくした者は、3中17.6%で深江中より多かった。3中では5人が父をなくしていた。深江中で祖父1人をなくしていた。大事なものを失った者は、3中24.3%で深江中より多かった。

家族が別れて住むようになった者が3中14.3%で深江中より多かった。家族の仕事が変化した者は3中と深江中ほぼ同率の5人に1人であった。

(3) 災害体験と不安得点

① 全体および性別（表2-1）

仮設住宅に住む者とそうでない者との間に不安得点の差はほとんどみられなかった。危険性を感じる者は、感じない者に比べ全体および男子、女子それぞれ

表2-1 災害体験と不安得点—全体および性別—

平均点(標準偏差)

		男	女	計
住居	自分の家	14.6(7.7)	17.2(7.5)	15.9(7.7)
	仮設住宅	14.3(7.0)	17.6(7.8)	15.9(7.6)
	その他	15.7(8.1)	16.6(6.9)	16.1(7.6)
危険	感じる	16.2(7.3)	18.4(7.3)	17.4(7.3)
	感じない	13.9(7.7)	16.5(7.5)	15.1(7.7)
危険の種類別	噴火	16.3(7.7)	17.5(6.9)	16.9(7.4)
	火砕流	17.0(7.8)	19.0(7.4)	18.1(7.6)
	土石流	17.8(8.3)	20.1(7.5)	19.0(8.0)
	降灰	16.3(6.9)	18.0(7.6)	17.2(7.3)
	その他	17.4(8.2)	17.9(5.7)	17.6(7.2)
身近な人の死	あり	14.0(6.8)	18.2(7.5)	16.4(7.5)
	なし	14.7(7.7)	17.1(7.5)	15.8(7.7)
なくなっ た人	父	6.8(2.9)	13.0(2.0)	8.8(3.9)
	母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	きょうだい	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	祖父母	3.0(0.0)	0(0.0)	3.0(0.0)
	その他	14.5(6.6)	18.3(7.4)	16.7(7.4)
大事なもの	失った	15.5(7.7)	17.6(7.7)	16.4(7.7)
	失ってない	14.5(7.6)	17.2(7.5)	15.8(7.7)
失ったもの	家	15.0(8.2)	16.0(8.6)	15.4(8.4)
	自分の持ち物	16.4(8.1)	18.7(8.1)	17.4(8.2)
	田畑	14.0(7.0)	17.9(7.2)	15.7(7.3)
	その他	15.7(7.1)	18.7(6.4)	17.1(6.9)
別れて住むよ うになった家 族	あり	15.2(7.6)	16.8(7.5)	16.1(7.5)
	なし	14.6(7.7)	17.2(7.5)	15.8(7.7)
別	父	17.4(6.7)	14.2(6.5)	15.7(6.8)
	母	14.4(5.3)	13.3(3.9)	13.8(4.6)

3章 精神保健への影響

		男	女	計
別の家族	きょうだい	18.1(8.1)	19.1(7.4)	18.8(7.7)
	祖父母	14.5(7.7)	16.7(7.6)	15.6(7.7)
	その他	15.9(6.0)	18.6(8.2)	17.5(7.5)
別居の理由	家が狭いため	15.0(6.6)	16.3(8.3)	15.6(7.5)
	仕事のため	17.0(6.7)	16.2(6.8)	16.6(6.7)
	通学のため	14.3(7.0)	17.6(6.3)	16.4(6.7)
	その他	15.9(8.6)	17.2(7.7)	16.7(8.1)
家族の仕事の変化	あり	16.1(7.7)	18.4(7.5)	17.2(7.6)
	なし	14.4(7.6)	17.0(7.5)	15.6(7.7)
家族の仕事	父の仕事が変わった	16.5(8.0)	18.7(7.2)	17.6(7.7)
	母の仕事が変わった	15.6(7.6)	17.8(7.8)	16.6(7.8)
	母が仕事を始めた	14.8(7.4)	19.9(6.7)	17.0(7.5)
	その他	17.3(6.5)	18.9(7.7)	18.2(7.3)

れにおいて不安得点が有意（ $P < 0.05$, T-test）に高かった。

身近な人をなくした者とそうでない者との間に有意差を認めなかった。父をなくした男子の不安得点6.8，女子の不安得点13.0で低い不安得点であった。ちなみに，父をなくした男子の？尺度は7.5，L尺度は0.8，女子の？尺度は5.0，L尺度は1.0であった。

大事なものを失った男子の不安得点が失わなかった者より有意に高い傾向（ $P < 0.10$, T-test）にあったが，全体および女子では有意差を認めなかった。

家族が別れて住むようになった者とそうでない者との間に有意差を認めなかった。父あるいは母と別れて住むようになった女子の不安得点が，男子の不安得点よりも低いのが特徴的であった。

家族の仕事が変化した者は変化しない者に比べ全体および男子，女子のそれぞれにおいて，不安得点が有意（ $P < 0.05$, T-test）に高かった。

② 学年別（表2-2）

仮設住宅に居住する者の不安得点の学年推移は，ほぼ全体の不安得点の推移

表2-2 災害体験と不安得点—学年別—

平均点(標準偏差)

		小 学 校				中 学 校			
		4 年	5 年	6 年	計	1 年	2 年	3 年	計
住 居	自分の家	16.3(7.4)	16.4(7.9)	14.9(7.3)	15.9(7.6)	14.3(7.7)	16.2(8.2)	17.0(7.3)	15.9(7.8)
	仮設住宅	17.4(7.9)	17.3(7.3)	15.0(7.9)	16.5(7.7)	12.9(6.9)	15.6(7.2)	16.4(7.7)	15.1(7.3)
	その他	16.3(8.4)	19.0(8.3)	16.2(6.8)	17.1(8.0)	13.2(7.7)	14.6(5.8)	17.0(7.1)	15.0(7.1)
危険	感じる	17.1(7.8)	18.7(7.2)	16.4(7.1)	17.6(7.4)	15.3(6.8)	18.0(7.1)	18.0(7.4)	17.0(7.2)
	感じない	16.0(7.4)	14.7(8.0)	14.3(7.3)	15.0(7.6)	13.5(8.0)	15.3(8.1)	16.6(7.2)	15.2(7.8)
危険の種類	噴火	15.7(7.3)	18.3(7.9)	15.9(6.2)	17.1(7.6)	14.9(6.4)	16.2(6.6)	18.2(7.3)	16.6(7.0)
	火砕流	19.4(7.5)	19.2(7.8)	16.9(8.0)	18.6(7.9)	15.6(6.4)	19.4(7.4)	18.3(7.6)	17.4(7.3)
	土石流	20.0(7.2)	20.5(8.1)	17.4(7.7)	19.7(7.9)	11.5(6.9)	17.3(7.6)	20.4(6.8)	17.2(7.9)
	降灰	15.5(7.5)	18.8(6.8)	17.4(7.2)	17.4(7.3)	14.4(7.5)	18.4(6.5)	17.6(7.6)	16.9(7.4)
	その他	19.8(10.5)	19.9(6.2)	15.1(5.9)	18.4(7.1)	17.3(8.1)	16.8(6.6)	12.5(4.4)	15.8(7.1)
身近な人の死	あり	15.1(7.8)	18.5(6.8)	16.2(7.2)	16.8(7.2)	13.1(7.5)	16.7(7.4)	18.1(7.5)	16.0(7.7)
	なし	16.5(7.6)	16.5(8.0)	14.9(7.4)	16.0(7.7)	14.2(7.6)	15.9(7.9)	16.7(7.2)	15.6(7.7)
なくなつた	父	9.0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	9.0(0.0)	9.3(5.4)	9.0(0.0)	7.0(0.0)	8.8(4.3)
	母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	きょうだい	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	祖父	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3.0(0.0)	3.0(0.0)

3章 精神保健への影響

		小 学 校					中 学 校				
		4 年	5 年	6 年	計	1 年	2 年	3 年	計		
人	の 他	15.3(7.8)	18.5(6.8)	16.2(7.2)	16.9(7.2)	13.3(7.4)	16.9(7.3)	19.3(5.7)	16.5(7.5)		
	失った 大事なものの	16.2(8.1)	20.0(7.6)	16.3(7.2)	17.5(7.8)	14.4(7.4)	14.7(6.8)	15.6(7.9)	14.9(7.4)		
失ったもの	失ってない	16.5(7.5)	16.2(7.8)	14.8(7.3)	15.8(7.6)	14.0(7.7)	16.1(8.0)	17.1(7.2)	15.8(7.7)		
	家	15.6(8.7)	19.1(8.2)	16.0(7.4)	16.9(8.2)	14.4(8.7)	10.6(4.1)	15.3(9.1)	13.9(8.3)		
自分の持ち物	田	17.1(8.3)	21.6(7.7)	16.7(8.1)	18.7(8.3)	14.1(6.0)	13.4(5.9)	16.2(8.3)	14.8(7.1)		
	畑	13.4(8.0)	18.1(6.2)	17.0(7.0)	16.4(7.3)	13.5(7.9)	14.8(6.2)	16.3(7.7)	14.8(7.3)		
別の住むようになった家族	の 他	15.4(8.5)	18.5(6.2)	20.6(6.8)	18.3(7.2)	15.8(4.7)	25.0(2.8)	13.1(5.1)	15.7(6.4)		
	あり	14.1(8.1)	17.4(7.3)	15.7(6.7)	15.6(7.4)	15.5(7.7)	18.3(7.0)	16.0(7.9)	16.4(7.6)		
別れて住むようになった家族	なし	16.8(7.6)	16.7(8.0)	15.0(7.3)	16.1(7.7)	13.9(7.7)	15.7(7.9)	16.9(7.3)	15.6(7.7)		
	父	13.8(6.0)	17.7(6.9)	12.8(5.2)	14.5(6.3)	21.4(5.6)	18.6(5.3)	10.5(8.5)	18.4(7.1)		
別れて住むようになった家族	母	14.0(6.1)	14.0(0.0)	11.7(3.1)	12.7(4.5)	13.5(4.3)	17.5(3.5)	19.0(0.0)	15.4(4.4)		
	きょうだい	18.3(6.8)	31.0(0.0)	14.3(8.4)	16.2(8.7)	22.3(8.5)	18.8(6.6)	21.1(5.4)	20.4(6.4)		
別居の家族	祖父母	14.0(8.5)	17.1(7.4)	16.0(6.5)	15.4(7.8)	13.6(6.5)	19.2(7.8)	15.3(7.8)	15.7(7.7)		
	その他	8.0(0.0)	16.6(4.8)	22.8(7.7)	17.3(7.7)	17.8(7.8)	0(0.0)	18.0(6.0)	17.8(7.2)		
別居の家族	家が狭いため	15.6(7.5)	17.3(6.5)	16.0(4.7)	16.2(6.5)	11.6(6.5)	20.3(7.1)	15.9(9.0)	15.1(8.3)		
	仕事のため	13.8(6.7)	15.7(6.5)	11.5(2.8)	13.7(5.7)	22.1(6.1)	19.0(5.0)	18.1(6.5)	20.0(6.3)		
別居の家族	通学のため	15.7(4.7)	14.3(2.9)	11.3(5.2)	13.0(5.0)	14.0(0.0)	20.6(6.4)	18.4(7.3)	18.8(6.8)		
	その他	14.2(9.1)	20.9(6.8)	19.3(6.9)	17.6(8.3)	17.5(8.5)	15.2(7.7)	14.9(6.9)	15.8(7.8)		

		小 学 校					中 学 校			
		4 年	5 年	6 年	計	1 年	2 年	3 年	計	
家族の仕事 の変化	あ	17.2(7.9)	18.3(7.3)	15.6(7.3)	17.0(7.5)	14.5(7.4)	17.6(7.4)	20.1(7.5)	17.4(7.7)	
	な	16.3(7.5)	16.4(8.0)	14.9(7.3)	15.9(7.6)	14.0(7.7)	15.6(8.0)	16.4(7.2)	15.4(7.7)	
家	父の仕事が変わった	18.0(8.1)	18.5(6.6)	17.3(7.7)	18.0(7.5)	16.1(7.2)	16.1(7.9)	20.2(7.3)	17.2(7.8)	
族	母の仕事が変わった	16.5(8.5)	17.3(6.9)	14.6(7.1)	16.1(7.7)	14.7(7.5)	17.0(7.5)	20.2(7.6)	17.3(7.9)	
の	母が仕事を始めた	17.3(7.4)	17.6(5.8)	14.7(7.1)	16.6(6.8)	11.6(6.1)	19.5(6.9)	20.4(8.2)	17.5(8.2)	
仕事	そ の 他	18.3(5.2)	25.0(10.7)	13.5(3.3)	17.0(6.9)	14.5(8.0)	21.1(6.0)	21.3(7.0)	19.6(7.4)	

と平行していた。

小学5年から中学2年では、危険性を感じる者の不安得点が感じない者に比べ有意 ($P < 0.05$, T-test) に高く、中学3年では有意に高い傾向 ($P < 0.10$, T-test) にあった。危険性の種別で不安得点の学年間のばらつきが目立つのは土石流であった。土石流に対して危険性を感じる者の不安得点は、小学4年と5年および中学3年が高く、中学1年は低かった。

身近な人をなくした者の学年間の不安得点の推移は、ほぼ全体の不安得点の学年推移と平行していた。

大事なものを失った者の不安得点は、小学5年がもっとも高く、中学1年がもっとも低かった。小学5年で、大事なものを失った者の不安得点が失わない者に比べて有意 ($P < 0.05$, T-test) に高かったが、他の学年では有意差はなかった。

家族が別れて住むようになった者の不安得点の学年推移は、全体の不安得点の学年推移と平行していなかった。不安得点がもっとも高いのは中学2年で、もっとも低いのは小学4年であった。小学4年で、家族が別れて住むようになった者の不安得点がそうでない者に比べ有意 ($P < 0.05$, T-test) に低かった。中学2年で家族が別れて住むようになった者の不安得点がそうでない者に比べ有意に高い傾向 ($P < 0.10$, T-test) にあった。

中学3年で、家族の仕事が変化した者の不安得点に変化しない者に比べ有意 ($P < 0.05$, T-test) に高かった。小学5年と中学2年でも、家族の仕事が変化した者が変化しない者に比べ不安得点が有意に高い傾向 ($P < 0.10$, T-test) にあった。

③ 学 校 別

a. 小 学 校 (表2-3)

大野木場小と深江小では、仮設住宅に住む者よりも「その他」に住むの方が不安得点の平均が高く、両校とも不安得点20以上で高い不安得点であった。

危険性を感じる者の不安得点は3小がもっとも高く、大野木場小、深江小、3小、5小で危険性を感じる者の不安得点が感じない者より有意 ($P < 0.05$, T-test) に高かった。危険性の種別では火砕流に対して危険性を感じる者の不安得点は、5小がもっとも高く、土石流と降灰に対しては大野木場小

表2-3 災害体験と不安得点—小学校—

平均点(標準偏差)

		小 学 校								計
		大野木場	小	林	深	江	島原第三	島原第四	島原第五	
住 居	自分の家	11.1(4.3)	16.1(7.2)	15.8(7.2)	15.5(8.0)	15.3(7.4)	17.1(7.6)	15.9(7.6)		
	仮設住宅	16.6(7.9)	0(0.0)	15.8(9.4)	0(0.0)	13.2(6.6)	17.4(7.6)	16.5(7.7)		
	その他の	21.3(8.1)	19.5(10.6)	22.9(11.2)	14.6(7.1)	13.9(6.7)	17.6(7.6)	17.1(8.0)		
危 険	感じる	18.5(8.2)	16.3(7.5)	17.1(6.9)	18.8(7.0)	15.1(7.3)	18.4(7.6)	17.6(7.4)		
	感じない	13.4(6.4)	15.8(6.6)	13.8(8.0)	14.6(7.9)	15.0(7.3)	16.1(7.4)	15.0(7.6)		
危 険 の 種 別	噴火	19.5(6.4)	10.3(2.0)	20.0(5.0)	16.3(7.1)	16.5(8.3)	17.2(8.1)	17.1(7.6)		
	火流	18.5(8.4)	16.9(6.6)	19.2(7.3)	18.8(7.9)	13.7(5.4)	20.1(8.5)	18.6(7.9)		
	土石流	24.5(9.1)	21.1(7.3)	19.3(8.0)	20.6(6.5)	16.9(7.3)	19.5(8.0)	19.7(7.9)		
そ の 他	降灰	20.2(7.2)	15.3(7.5)	17.0(6.7)	19.5(6.0)	15.3(6.1)	18.8(8.8)	17.4(7.3)		
	その他	0(0.0)	0(0.0)	20.2(8.4)	14.2(4.9)	0(0.0)	19.1(6.8)	18.4(7.1)		
	ありなし	17.1(9.5)	13.5(7.5)	19.0(7.8)	14.8(4.4)	15.0(6.6)	17.7(7.2)	16.8(7.2)		
身近な人の死	父	16.0(7.5)	16.5(7.1)	15.9(7.4)	15.4(8.1)	15.1(7.4)	17.1(7.8)	16.0(7.7)		
	母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	9.0(0.0)	9.0(0.0)		
	きょうだい	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)		
な くな っ た	祖父	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)		
	祖母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)		

3章 精神保健への影響

		小 学 校										計
		大野木場	小	林	深	江	島原第三	島原第四	島原第五			
人	他の	17.1(9.5)	13.5(7.5)	19.0(7.8)	14.8(4.4)	15.0(6.6)	17.9(6.9)	16.9(7.2)				
	失った	16.4(7.4)	11.0(0.0)	19.9(9.6)	16.6(7.2)	15.9(4.6)	18.1(8.1)	17.5(7.8)				
大事なもの	失ってない	16.3(9.5)	16.2(7.2)	15.9(7.3)	15.5(8.0)	15.0(7.4)	16.9(7.3)	15.8(7.6)				
	家の	20.0(8.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	14.2(4.0)	16.1(8.3)	16.9(8.2)				
失ったもの	自分の持ち物	16.5(7.3)	11.0(0.0)	22.1(9.9)	21.0(1.0)	0(0.0)	20.6(8.6)	18.7(8.3)				
	畑	17.4(6.5)	0(0.0)	15.5(3.5)	15.0(8.0)	9.0(0.0)	16.3(7.5)	16.4(7.3)				
別れて住むようになった家族	他の	20.8(7.0)	0(0.0)	16.5(7.5)	11.0(0.0)	20.0(0.0)	17.5(7.5)	18.3(7.2)				
	ありなし	15.8(6.7)	16.0(8.5)	15.2(7.7)	14.8(6.1)	14.7(8.3)	16.3(7.7)	15.6(7.4)				
別れて住むようになった家族	父	16.8(8.1)	16.4(7.4)	16.3(7.5)	15.4(8.0)	15.0(7.3)	17.3(7.5)	16.1(7.7)				
	母	16.1(7.4)	10.0(0.0)	11.7(5.1)	21.0(0.0)	21.5(2.5)	15.0(4.6)	14.5(6.3)				
別居の家族	きょうだい	11.0(0.0)	0(0.0)	12.8(4.9)	0(0.0)	0(0.0)	14.0(0.0)	12.7(4.5)				
	祖父母	9.0(1.6)	0(0.0)	17.4(8.6)	0(0.0)	13.0(6.4)	29.0(2.0)	16.2(8.7)				
別居の家族	その他	16.6(7.0)	0(0.0)	15.4(8.0)	12.8(5.6)	12.7(8.4)	16.3(7.6)	15.4(7.8)				
	家が狭いため	15.5(1.5)	0(0.0)	21.6(7.9)	0(0.0)	0(0.0)	12.8(6.0)	17.3(7.7)				
別居の家族	仕事のため	15.3(6.1)	0(0.0)	14.0(6.7)	0(0.0)	16.0(6.7)	17.5(6.3)	16.2(6.5)				
	通学のため	17.2(6.8)	10.0(0.0)	11.9(4.5)	16.5(5.5)	19.0(0.0)	12.1(4.5)	13.7(5.7)				
その他	9.0(2.0)	0(0.0)	13.0(5.1)	0(0.0)	14.0(7.1)	14.3(2.5)	13.0(5.0)					
その他	13.0(1.0)	0(0.0)	19.8(7.9)	13.0(5.9)	18.0(7.3)	17.8(9.3)	17.6(8.3)					

		小 学 校						
		大野木場	小 林	深 江	島原第三	島原第四	島原第五	計
家族の仕事の 変化	あ り	15.6(7.9)	12.9(6.0)	17.3(8.4)	21.1(7.9)	14.5(6.4)	17.0(6.9)	17.0(7.5)
	な し	17.3(7.8)	16.5(7.2)	15.9(7.3)	15.0(7.8)	15.0(7.4)	17.4(7.9)	15.9(7.6)
家 族 の 仕 事	父の仕事が変わった	17.8(10.2)	17.0(1.0)	17.5(7.0)	22.9(4.9)	15.0(5.9)	17.4(7.2)	18.0(7.5)
	母の仕事が変わった	14.4(7.1)	9.8(4.8)	16.1(9.9)	19.6(9.7)	15.7(5.3)	17.1(6.9)	16.1(7.7)
	母が仕事を始めた	14.5(5.8)	20.0(0.0)	15.8(7.5)	21.2(7.5)	4.0(0.0)	16.9(4.7)	16.6(6.8)
	そ の 他	21.0(6.0)	0(0.0)	22.3(4.1)	23.3(8.3)	11.0(0.0)	13.0(3.1)	17.0(6.9)

がもっとも高かった。噴火に対しては深江小がもっとも高かった。

身近な人をなくした者と大事なものを失った者の不安得点は、深江小がもっとも高く、大事なものを失った者の不安得点が失わない者より有意に高い傾向 ($P < 0.10$, T-test) にあった。

家族が別れて住むようになった者の不安得点は、学校間差は少なかった。しかし、6校すべてにおいて、家族が別れて住むようになった者の不安得点がそうでない者よりも低いという特徴がみられた。なかでも、母と別れて住むようになった者は全体的に低かった。

家族の仕事が変化した者の不安得点は、大野木場小、5小、深江小で大差はなかった。3小で、家族の仕事が変化した者の不安得点に変化しない者より有意 ($P < 0.05$, T-test) に高かった。

b. 中学校 (表2-4)

仮設住宅に住んでいる者の不安得点は3中より深江中が高かった。

危険性を感じる者の不安得点は深江中、2中、3中の順であった。危険性を感じる者の不安得点を感じない者より、2中で有意 ($P < 0.05$, T-test) に高く、深江中で有意に高い傾向 ($P < 0.10$, T-test) にあったが、3中では有意差を認めなかった。

身近な者をなくした者の不安得点は、3中より深江中が高かった。3中で父をなくした者および深江中で祖父をなくした者の不安得点は低かった。

大事なものを失った者の不安得点の平均値は、3中より深江中が高かった。3中では大事なものを失った者が失っていない者より不安得点が低かった。

家族が別れて住むようになった者および家族の仕事が変化した者の不安得点は、3中より深江中が高かった。家族の仕事が変化した者の不安得点に変化しない者より、深江中では有意 ($P < 0.05$, T-test) に高く、2中と3中では有意に高い傾向 ($P < 0.10$, T-test) にあった。

4. 災害と子ども

(1) 災害によるストレス

人は災害に遭遇すると強い恐怖を感じる。その恐怖には、①自分の生命を失うことに対する恐怖、②家族の生命を失うことに対する恐怖、③財産を失うことに対する恐怖、④住居や住処を失うことに対する恐怖がある。これらの恐怖

表2-4 災害体験と不安得点—中学校—

平均点(標準偏差)

		中 学 校			
		深 江	島 原 第 二	島 原 第 三	計
住 居	自 分 の 家	17.2(7.7)	15.3(7.8)	15.4(7.8)	15.9(7.8)
	仮 設 住 宅	17.6(6.8)	0(0.0)	13.3(7.3)	15.1(7.3)
	そ の 他	19.5(5.8)	15.7(6.6)	13.3(7.1)	15.0(7.1)
危 険	感 じ る	18.3(7.1)	16.9(7.0)	15.2(7.1)	17.0(7.2)
	感 じ ない	16.8(7.6)	15.0(7.9)	14.4(7.8)	15.2(7.8)
危 険 の 種 別	噴 火	18.9(6.1)	15.8(7.3)	15.8(6.7)	16.6(7.0)
	火 砕 流	19.0(6.9)	16.9(8.0)	14.6(6.7)	17.4(7.3)
	土 石 流	18.4(6.7)	16.8(10.3)	16.2(8.2)	17.2(7.9)
	降 灰	16.3(7.4)	18.5(7.5)	15.0(6.3)	16.9(7.4)
	そ の 他	28.0(0.0)	15.2(5.4)	14.6(7.3)	15.8(7.1)
身近な人の死	あ り	17.7(7.5)	17.4(7.5)	14.7(7.7)	16.0(7.7)
	な し	17.4(7.5)	15.2(7.7)	14.5(7.6)	15.6(7.7)
な く な っ た 人	父	0(0.0)	0(0.0)	8.8(4.3)	8.8(4.3)
	母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	き ょ う だ い	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	祖 父 母	3.0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3.0(0.0)
	そ の 他	18.5(6.9)	17.4(7.5)	15.2(7.6)	16.5(7.5)
大事なもの	失 っ た	18.2(7.0)	16.0(8.5)	13.6(7.1)	14.9(7.4)
	失 っ て ない	17.3(7.5)	15.3(7.7)	14.9(7.8)	15.8(7.7)
失 っ た も の	家	21.6(4.8)	12.0(0.0)	12.3(8.0)	13.9(8.3)
	自 分 の 持 ち 物	16.5(7.1)	13.0(0.0)	14.2(7.2)	14.8(7.1)
	田 畑	18.2(7.9)	8.0(4.0)	14.3(6.9)	14.8(7.3)
	そ の 他	17.1(4.2)	19.8(7.2)	9.2(2.3)	15.7(6.4)
別れて住むようになった家族	あ り	18.3(7.0)	17.2(6.5)	14.8(8.1)	16.4(7.6)
	な し	17.3(7.5)	15.2(7.7)	14.4(7.6)	15.6(7.7)
別	父	22.0(4.7)	20.7(6.8)	14.2(6.8)	18.4(7.1)

3章 精神保健への影響

		中 学 校			
		深 江	島 原 第 三	島 原 第 四	計
別 の 家 族	母	19.0(0.0)	13.8(4.7)	17.0(3.0)	15.4(4.4)
	きょうだい	21.9(5.9)	18.4(4.4)	18.5(7.9)	20.4(6.4)
	祖 父 母	18.6(7.0)	15.4(6.0)	14.0(7.8)	15.7(7.7)
	そ の 他	15.0(3.0)	0(0.0)	19.3(8.3)	17.8(7.2)
別 居 の 理 由	家が狭いため	19.8(7.0)	8.0(0.0)	13.7(8.2)	15.1(8.3)
	仕事のため	19.9(6.4)	20.4(5.5)	19.8(6.7)	20.0(6.3)
	通学のため	20.7(6.3)	0(0.0)	12.0(3.5)	18.8(6.8)
	そ の 他	16.3(6.2)	15.0(5.8)	15.8(9.1)	15.8(7.8)
家族の仕事の 変化	あ り	19.0(7.1)	17.6(7.4)	15.9(8.2)	17.4(7.7)
	な し	17.0(7.5)	15.2(7.8)	14.2(7.4)	15.4(7.7)
家 族 の 仕 事	父の仕事が変わった	19.9(7.4)	13.7(5.3)	16.0(8.0)	17.2(7.8)
	母の仕事が変わった	18.5(7.3)	19.2(8.4)	15.8(7.8)	17.3(7.9)
	母が仕事を始めた	19.4(8.6)	21.0(1.0)	16.5(8.2)	17.5(8.2)
	そ の 他	21.3(5.1)	23.0(6.2)	10.3(8.5)	19.6(7.4)

は災害の性質により異なり、出現する精神症状も異なる可能性がある。災害によって引き起こされる精神疾患や症状には、①原始反応（驚愕反応）、②既存の精神疾患の増悪、③外傷性ストレス障害がある（黒沢ら，1933）。

災害によるストレスの後遺症（PTSD; post traumatic stress disorder）の症状として、外傷前にはなかった反応性の鈍麻として、活動に対する興味の著しい減退や社会的な引きこもり、感情の障害があり、未来への希望を失うなどの特徴がみられる。覚醒の亢進を示す持続的な症状として、睡眠障害、易刺激性またはかんしゃく発作、集中困難などがあるとされる（DSM-III-R, ICD-10）。

Green, B. L. ら（1991）はバッファロー・クリークのダム決壊で被災した子どもの37%が、被災後2年目にPTSDと診断され、男子より女子に高かったと報告している。

(2) 不安の性差と学年推移

今回の調査では、児童・生徒の不安得点の平均は15.7である。坂本（1965）は総じて15～18の間であるとしているので、正常の範囲内で、低い方に位置していることになる。小学校16.1、中学校15.7で、小学校と中学校の間で大きな差はみられない。

不安得点の平均の学年推移は中学3年が16.9でもっとも高く、中学1年が14.1でもっとも低い。

男子14.7、女子17.2で、女子の不安得点の平均が男子よりも高く、性差がみられる。性差には学年推移がみられ、小学4年では男子と女子の不安得点の平均にはほとんど差異がみられないが、小学5年になると性差が明らかとなり、小学6年では性差はより大きくなり、中学では3学年とも明らかに性差が認められる。不安得点の性差は小学中学年頃から顕在化し、中学になりより明白になってきている。

坂本らの研究でも、いずれの学年も女子が高く、性差は比較的恒常的である。従来から、多くの研究で不安傾向は女子が高いとする研究が多い（Levitt., 1967. 東, 1982. 間宮, 1979. 阿部, 1982. ）。今回の調査でも、女子の不安得点の平均が高く、学年推移が認められ、性差の発達として興味深い結果である。

(3) 不安の学校差

学校毎の不安得点に影響を与える要因として、第一には校区の人的・物的な被災の状況が考えられる。なくなった人や失ったものが多く、避難生活をしている人の割合が高い校区ほど、児童・生徒の精神生活への影響はさげがたいであろう。また、被災状況を左右する普賢岳とそこを源とする河川等の地形学的な条件や、校区の生活実態等の多様な要因が複雑に絡み合いながら、学校別の不安得点の平均に影響を与えていくであろう。

深江町内の小学校3校は、被災状況や地形学的な条件等がそれぞれ異なっているにもかかわらず、不安得点の平均がほとんど同じである。島原市内の小学校3校の不安得点の平均は、校区内に避難区域を含まない3小が中間に位置し、それより4小は低く、5小は高い。5小は校区全体が広範囲に避難区域に入っており、調査時点で、児童の約半数が仮設住宅および災害のために住居の

変更を余儀なくされていた。父親を火砕流でなくした児童も在籍しており、火砕流に対して危険性を感じる児童の不安得点の平均が対象9校のうちでもっとも高い。

中学校3校の不安得点の平均は、校区内に避難区域を含まない2中を中心に深江中と3中が高・低の二方向に対置している。対象9校中で深江中の不安得点をもっとも高く、3中をもっとも低い。3中には父親をなくした5人の生徒が在籍している。噴火災害に対して危険性を感じるという外的な環境刺激に対する恐怖や、家族の仕事の変化に伴う将来への不安は、深江中の生徒の方が高い。一方、3中には、身近な人をなくし、自分が住みなれた家や大事なものを失うという喪失体験を重ねながら、避難生活をしている生徒の割合が多い。

3中の不安得点の低さは、顕在性不安としてはとらえられない、より重篤な問題の所在を示唆しているように思われる。考えられる問題としては、喪失体験を重ねて、先の見通しの立たない災害の危険性のもとでの長期の避難生活から、児童・生徒に潜在しているかもしれない抑うつ気分、悲哀感、無気力、自信喪失、精神疲労などである。顕在性不安検査ではとらえきれなかった児童・生徒に潜在する問題について、精神医学的面接や子どもの抑うつ自己評価尺度CDI (Kovacs, M. 1983. Children's Depression Inventory)(村田, 1992)などを用いたスクリーニングを行い、高得点の児童・生徒に対し個別的な精神医学的な援助の必要性が痛感される。

(4) 災害への危険性

災害に対して危険性を感じる者の不安得点は危険性を感じない者より有意に高く、土石流や火砕流に対する女子の不安得点が高い。危険性を感じる者の割合や危険性の種別は学校によってちがいがあり、災害への危険性は校区によって差異がみられる。災害に対する危険性は環境刺激に対する恐怖あるいは不安反応であり、噴火活動とそれに伴って起こる災害のいかんや時間経過の中で浮動していくもので、今回の調査では陽性の徴候としてとらえられた。

(5) 住まいの喪失

仮設住宅に住んでいる者およびアパートや借家などで避難生活をしている者が全体の約20%におよんでいる。大野木場小では5人に1人、5小と3中では10人に1人の割合で、住みなれた家を失っている。くつろぎと安らぎを与え、

家族の絆を強める家を失い、あるいは失ってはいないが、避難区域のため自分の家に住むことができず、狭くて、窮屈で、不便な、住み心地の悪い仮設住宅などでの、長期におよぶ不安定な避難生活をしいられている児童・生徒の精神面や行動面への影響は見過ごせないであろう。

住まいを失うことは家族と家族成員の一人ひとりにとっての大事なものも同時に失うことである。子どもの場合、衣類や文房具、ペットなどの他に、他人にとってはどうでもよいような物でも、一人ひとり愛着していた大事な宝物である。家を失うことは家族と家族成員の一人ひとりの生活とアイデンティティを失うことでもあると、Raphael (1986) は述べている。

今回の被災地域は農村地帯であり、失ったものとして住みなれた家のほかに一家の生計を支えてきた田畑や山林も含まれており、強い喪失感と今後の生活の不安を一層深めているものと考えられ、そのような大人の喪失感や不安は子どもたちの将来設計に影響を与えているものと思われる。家や大事なものを失った人々への援助は、失ったものの代わりを提供するという物質的な保証に留まらない、精神的な側面への配慮が必要である。

(6) 近親者の死

肉親や近隣の人や知人等身近な人をなくした者が全体の約10%にのぼる。不安得点の平均は、男子は低めに、女子は高めである。特徴的なことは、父親をなくした児童・生徒6人の不安得点の低さである。親との死別は子どもにとってもっとも大きな喪失体験であり、ストレス体験である。さらに、残された親の苦痛や悲嘆等の情動状態による影響も避けられない。

Raphael (1986) は次のように述べている。子どもたちは災害による死別体験に対して、パターン通りに反応することもあるし、パターン通りに反応しないこともある。災害による喪失反応として、特に男子の場合攻撃的な行動が増加する傾向があるし、その他に退行現象や「分離不安」による反応、引きこもり、睡眠や食生活の障害や腹痛や頭痛などの心身症的な反応等のこともある。Raphael の他にも、災害による近親死体験後におこる行動上の問題や不安・抑うつなど個別的な障害についての報告がみられる。子どもが経験する災害による親との死別体験は、災害直後から、さらに成長・発達の縦断的な過程の中で、重大な影響をもたらすものでありとされらる。

(7) 家族が別れて住むこと

災害後の不安な状態で家族が分散し、子どもが親から分離されることは極力避けなければならないが、約10%の児童・生徒が噴火災害のために家族が別れて住んでいる。全体の不安得点の平均は男子よりも女子が有意に高いにもかかわらず、父および母と別れて住むようになった女子の不安得点は男子よりも低い。とりわけ母と別れて住むようになった女子の不安得点が低いのが特異的である。不安得点の平均点からみると、男子よりも女子に、女子にとっては父よりも母との分離がより深刻な反応を示唆していないであろうか。

小学4年では他の学年と異なり、家族が別れて住むようになった者がそうでない者より有意に不安得点が低い。年齢が低い者の長期の親との分離体験の影響を考察するにあたって、重要な視点を提供するのではないかと考えられる。今回のように長期化した災害下で、見通しの立たない不安な避難生活をしいられ、親との分離の期間も長引いている子どもたちの精神発達への格別の配慮がもとめられる。

(8) 家族の仕事が変わること

災害は被災した人々に喪失と変化を余儀なくさせる。近親者をなくし、大事なものを失い、いつまでも終息の気配をみせない噴火活動に不安といらだちをおぼえながらの不自由な避難生活のなかで、親たちは一家の生活を支えるための仕事に精を出さなければならない。そのために転職した家族が16%にものぼっている。

家族の仕事が変化した者は変化しない者に比べ、不安得点が有意に高いが、母が仕事を始めた女子の不安得点の平均点がかつても高い。家族の分散とも合わせて考えてみると、女子は男子よりも母親との関係により強く反応し、不安得点にも影響を与えていると考えられる。

学年別でみると、中学3年で家族の仕事が変化した者の不安得点の平均がかつても高く、変化しない者との間の不安得点の平均の差がかつても大きく有意の差が認められている。将来の進路を決めなければならない岐路に立っている中学3年生の不安な気持ちが不安得点の高さとして表出されていると考えられる。調査実施が1992年秋、ちょうど進路決定をしなければならない時期であった。

2 節 教職員のストレス

1. はじめに

通常から教師は職業上のストレスの強い職種である。対人専門職として、医師、看護婦、教師、臨床心理家などがあるが、長い時間、子どもとの相互作用の中で仕事をしなければならない教師のストレスは強い。

1970年後半頃より、対人専門職に従事する人々の燃えつき現象が問題にされ始めた。宗像（1988）はそれまでの研究者の定義から、“燃えつき”とは、自らの理想を求め悩みながら努力してきたが、その結果は不満足感、疲労感、失敗感だけをもつに至った状態であると述べている。“燃えつき”ていく教師も多く、関係者の関心は高い。

平常時でさえも、強いストレスにさらされている教師が、この度の雲仙・普賢岳の長期化した噴火災害下で、児童・生徒の安全と健康を守りながら、教育活動を続けていくことは、今までよりも更に強いストレスを受けることになったであろうと思われる。そこで、噴火災害下における教職員のストレス調査を実施することにした。

方法としては、アンケートおよびGHQ精神健康調査票（The General Health Questionnaire by Goldberg, D.P.）60項目版を用いた。GHQは多数の集団から minor psychiatric complaints（神経症症状とその関連症状）をもつ人々の症状とその程度を客観的に把握するために開発された質問紙法による調査票である。環境変化に伴う精神健康度の調査のための rating scale として、信頼性、妥当性が十分に検討された調査票である。

2. 調査の方法

調査は児童・生徒に対する顕在性不安検査（CMAS）と同時に行った。実施期間は1992年9月から同年11月にかけてである。調査対象は児童用顕在性不安検査（CMAS）を施行した島原市内小学校3校、中学校2校、深江町の小学校3校、中学校1校、および島原市と深江町の教育委員会の全教職員である。調査票配布数278人、回収率87%であった。調査はアンケートと日本版一般健康調査質問紙法（GHQ）を同時に実施した。

3章 精神保健への影響

なおGHQの得点の基準は次のとおりである。総得点は16/17を神経症者と正常者の区分点としている（中川，1981）。要素点である身体的症状，不安と不眠，社会的活動障害，うつ状態の得点が5以上であれば中等度以上の症状，3～4であれば軽度の症状をもっていると臨床的に評価できるとされている。男女別の基準は示されていない。

3. 結果の概要

(1) 災害体験の実態（表3-1，表3-2）

噴火災害に対して危険性を感じる者は男性52.9%，女性69.9%で男性より女性が多かった。身近な人をなくした者は男性27.7%，女性11.6%で男性が多かった。なくなった人は児童・生徒の父がもっとも多かった。仮設住宅に居住している者が男女各1人であった。通勤時間に影響のあった者は43.0%，現在（1992年度）自分のクラスに避難生活をしている児童・生徒がいる者は37.0%，昨年（1991年度）自分のクラスに避難生活をしている児童・生徒がいた者は32.7%，仕事量に変化した者は76.8%で，男女間にほとんど差はなかった。児童・生徒の生活面や行動面でマイナスの影響を感じる者は男性70.0%，女性90.4%で女性に多かった。児童・生徒の生活・行動面でプラスの影響を感じる者は男性48.6%，女性54.8%であり差はみられなかった。児童・生徒の学習面でマイナスの影響を感じる者は77.6%，プラスの影響を感じる者は15.7%で男女ほぼ同率であった。

(2) GHQの結果

① 全体および性別

総得点の平均は男性12.4，女性18.3で，男女間に有意（ $P < 0.05$ ，T-test）の差が認められた。身体的症状の得点の平均は男性2.5，女性3.3，不安と不眠は男性2.0，女性2.7，社会的活動障害は男性1.1，女性1.7であった。身体的症状，不安と不眠，社会的活動障害の得点の平均は男性より女性が有意（ $P < 0.05$ ，T-test）に高かった。うつ状態は男性0.2，女性0.5で，男女間に有意の差は認められなかった。

② 学校別

総得点および各要素の得点の平均は，各学校および教育委員会の間で，有意の差は認められなかった。

表 3 - 1 災害体験の実態—全体および性別—

実数 (%)

		男(N=88)	女(N=114)	計(N=202)
危 険	感 じ る	46(52.3)	79(69.3)	125(61.9)
	感 じ ない	41(46.6)	34(29.8)	75(37.1)
危 険 の 種 別	噴 火	10(11.4)	18(15.8)	28(13.9)
	火 砕 流	26(29.5)	46(40.4)	72(35.6)
	土 石 流	7(8.0)	19(16.7)	26(12.9)
	そ の 他	8(9.1)	9(7.9)	17(8.4)
身近な人の死	あ り	24(27.3)	13(11.4)	37(18.3)
	な し	63(71.6)	99(86.8)	162(80.2)
失 っ た 人	児 童 ・ 生 徒 の 父	15(17.0)	11(9.6)	26(12.9)
	親 類	4(4.5)	2(1.8)	6(3.0)
	友 人 ・ 知 人 ・ 隣 人	5(5.7)	2(1.8)	7(3.5)
失 っ た 物	あ り	9(10.2)	11(9.6)	20(9.9)
	な し	78(88.6)	103(90.4)	181(89.6)
失 っ た 物	自 宅	2(2.3)	0(0.0)	2(1.0)
	財 産 ・ 所 有 物	3(3.4)	3(2.6)	6(3.0)
	田 畑 ・ 山 林	3(3.4)	0(0.0)	3(1.5)
	そ の 他	3(3.4)	8(7.0)	11(5.4)
住 居	自 宅	62(70.5)	91(79.8)	153(75.7)
	仮 説 住 宅	1(1.1)	1(0.9)	2(1.0)
	親 戚 ・ 知 人 の 家	4(4.5)	0(0.0)	4(2.0)
	そ の 他	20(22.7)	22(19.3)	42(20.8)
通勤時間への影響	あ り	37(42.0)	49(43.0)	86(42.6)
	な し	50(56.8)	64(56.1)	114(56.4)
通 勤 時 間	長 くな っ た	27(30.7)	36(31.6)	63(31.2)
	短 くな っ た	10(11.4)	13(11.4)	23(11.4)

3章 精神保健への影響

表3-2 教育活動への影響の実態—全体および性別—

実数 (%)

			男(N=88)	女(N=114)	計(N=202)
自分のクラスでの避難生活者 (現在の担任)	い ない		12(13.6)	22(19.3)	34(16.8)
	い る		23(26.1)	35(30.7)	58(28.7)
自分のクラスでの避難生活者 (今年の担任)	い ない		13(14.8)	20(17.5)	33(16.3)
	い る		23(26.1)	45(39.5)	68(33.7)
仕事量の変化	な い		21(23.9)	23(20.2)	44(21.8)
	あ る		64(72.7)	82(71.9)	146(72.3)
生活面・行動 での影響	マイナス	感じない	7(8.0)	9(7.9)	16(7.9)
		感じる	66(75.0)	85(74.6)	151(74.8)
	プラス	感じない	36(40.9)	38(33.3)	74(36.6)
		感じる	34(38.6)	46(40.4)	80(39.6)
学習面での影響	マイナス	感じない	17(19.3)	17(14.9)	34(16.8)
		感じる	52(59.1)	66(57.9)	118(58.4)
	プラス	感じない	55(62.5)	58(50.9)	113(55.9)
		感じる	10(11.4)	11(9.6)	21(10.4)

③ 災害体験の影響 (表4-1)

a. 総得点

総得点の平均は、危険性を感じる者が感じない者より有意 ($P < 0.05$, T-test) に高かった。女性で危険性を感じる者の総得点は20.3と高かった。身近な人をなくした者の総得点はなくしていない者より有意に高い傾向 ($P < 0.10$, T-test) にあった。身近な人をなくした者のうち、女性の総得点は30.6と非常に高く、なかでも児童・生徒の父をなくした女性の総得点は32.0と高かった。大事なものを失った者のうち、対象の人数が少ないが、自宅を失った者の総得点4.0、田畑・山林を失った者の総得点3.7と非常に低値であった。一方、財産・所有物を失った者の総得点は男性26.0、女性36.7と非常に高かった。仮設住宅居住者の総得点は低かった。通勤時間に影響を受けたか否かで、総得点に差はみられなかった。

表 4-1 災害体験と GHQ 総得点

平均点 (標準偏差)

		男	女	計
危険	感じる	12.9(9.1)	20.3(14.4)	17.5(13.1)
	感じない	11.9(11.3)	15.8(10.8)	13.6(11.3)
危険の種類	噴火	10.5(7.2)	21.7(16.2)	17.7(13.0)
	火砕流	13.3(9.2)	20.2(14.2)	17.7(13.0)
	土石流	15.7(15.8)	18.8(14.8)	18.0(14.8)
	その他	11.6(6.3)	23.4(16.6)	17.9(13.8)
身近な人の死		あり	30.6(14.9)	19.3(13.5)
		なし	12.1(11.1)	16.9(12.2)
失った人	児童・生徒の父	15.1(7.3)	32.0(15.7)	22.2(14.2)
	親類	10.0(6.9)	23.0(8.5)	14.3(9.4)
	友人・知人・隣人	7.0(6.6)	22.0(7.1)	11.3(9.6)
失った物		あり	21.0(19.9)	17.4(17.6)
		なし	12.4(9.8)	18.7(12.8)
失った物	自宅	4.0(1.4)	0(0.0)	4.0(1.4)
	財産・所有物	26.0(18.7)	36.7(29.1)	31.3(22.7)
	田畑・山林	3.7(3.2)	0(0.0)	3.7(3.2)
	その他	9.7(5.1)	15.1(13.3)	13.6(11.6)
住居	自宅	12.0(9.9)	19.3(13.8)	16.3(12.9)
	仮設住宅	3.0(0.0)	4.0(0.0)	3.5(0.7)
	親戚・知人の家	17.5(15.1)	0(0.0)	17.5(15.1)
	その他	13.1(10.6)	18.0(11.8)	15.7(11.7)
通勤時間への影響		あり	20.4(14.6)	16.5(13.5)
		なし	13.3(10.6)	17.5(12.6)
通勤時間		長くなった	20.8(14.4)	16.3(13.3)
		短くなった	13.4(11.9)	19.5(15.6)

3章 精神保健への影響

b. 身体的症状

身体的症状の得点の平均では、有意の差が認められる項目はなかった。ちなみに、身体的症状の要素点の得点の平均が4.0以上の項目は、男性では財産・所有物を失った者、女性では噴火に対して危険性を感じる者、身近な人をなくした者、児童・生徒の父をなくした者、財産・所有物を失った者であった。

c. 不安と不眠

不安と不眠の得点の平均では、危険性を感じる者および身近な人をなくした者が、そうでない者よりも有意 ($P < 0.05$, T-test) に高かった。ちなみに、不安と不眠の得点が3.0以上の項目は、女性で、危険性を感じる者、火砕流に対し危険性を感じる者、身近な人をなくした者、大事なものを失った者、財産・所有物を失った者、通勤距離が長くなった者であった。なかでも身近な人をなくした者の要素点は4.8、財産・所有物を失った者の要素点は4.6と高得点であった。

d. 社会的活動障害

社会的活動障害の得点の平均で有意の差が認められる項目はなかった。ちなみに、社会的活動障害の得点が3.0以上の項目は、女性で、身近な人をなくした者、児童・生徒の父をなくした者、財産・所有物を失った者であった。なかでも、財産・所有物を失った者の得点は5.0と高かった。

e. うつ状態

うつ状態の得点の平均は、危険性を感じる者が感じない者よりも有意 ($P < 0.05$, T-test) に高かった。財産・所有物を失った者のうつ状態の要素点は4.0と高かった。

④ 教育活動への影響 (表4-2)

a. 総得点

総得点の平均では、仕事量の変化のある者、生活面・行動面のマイナスの影響を感じる者、学習面でマイナスの影響を感じる者が感じない者に比べ有意 ($P < 0.05$, T-test) に高かった。

b. 身体的症状

身体的症状の得点の平均は、生活面・行動面でマイナスの影響があると感じる者が有意 ($P < 0.05$, T-test) に高かった。

表 4-2 教育活動への影響と GHQ —総得点—

平均点 (標準偏差)

			男	女	計
自分のクラスでの避難生活者 (現在の担任)	い ない		10.0(13.7)	15.4(10.5)	13.5(11.8)
	い る		12.9(9.7)	20.5(14.3)	17.5(13.1)
自分のクラスでの避難生活者 (昨年の担任)	い ない		12.1(10.1)	18.1(13.4)	15.7(12.4)
	い る		10.9(10.0)	20.7(14.6)	17.4(13.9)
仕事量の変化	な い		10.0(9.7)	15.4(11.2)	12.8(10.8)
	あ る		12.8(10.2)	20.5(14.0)	17.2(13.1)
生活面・行動面での影響	マイナス	感じない	6.0(3.4)	8.8(12.0)	7.6(9.1)
		感じる	12.3(10.7)	20.2(13.2)	16.8(12.8)
	プラス	感じない	14.8(11.2)	15.8(10.2)	15.3(10.6)
		感じる	9.4(8.9)	20.8(15.8)	15.9(14.6)
学習面での影響	マイナス	感じない	8.8(8.8)	14.4(13.2)	11.6(11.4)
		感じる	13.3(11.0)	20.1(13.5)	17.1(13.0)
	プラス	感じない	12.4(11.1)	18.9(14.4)	15.7(13.2)
		感じる	11.8(10.1)	18.7(12.5)	15.4(12.2)

c. 不安と不眠

不安と不眠の得点の平均では、仕事量の変化の有無、生活面・行動面でのマイナスの影響の有無、学習面でのマイナスの影響の有無の項目において有意 ($P < 0.05$, T-test) の差がみられた。

d. 社会的活動障害

社会的活動障害の得点の平均では、生活面・行動面でのマイナスの影響の有無の項目で有意 ($P < 0.05$, T-test) の差が認められた。学習面でマイナスの影響を感じる者が感じない者に比べ有意に高い傾向 ($P < 0.10$, T-test) にあった。

e. うつ状態

うつ状態の得点の平均では、現在クラスに避難生活をしている児童・生徒がいる者、生活面・行動面でマイナスおよびプラスの影響の有無で有意 ($P <$

0.05, T-test) の差がみられた。

4. 教職員のストレス

(1) 性差とストレス

GHQ総得点の平均は男性は12.4と低いが、女性は18.3と高く神経症水準にある。要素点をみても、女子では軽度の身体的症状の存在が認められ、不安と不眠も臨床症状に近い。総得点および身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害において、男性より女性の得点が有意に高く、うつ状態では有意の傾向で高く、明らかな性差を認めている。この明らかな性差は、以下に考察する災害体験や教育活動への影響など、ほぼすべての項目にわたってかなり顕著にあらわれている。

性差は生物学的な要因と、心理社会的な要因の絡み合いによって生じてくるが、精神障害の受診率をみると、女性の受診率が高く、うつ病や神経症に女子の受診が著しく多いという実態がみられる(加藤, 1985)。

宗像ら(1988)は、中学校教師の燃えつき状態が多発しやすい層は、①学校内で生徒の教育や指導に重い責任や負担を負っている教師層、②経験がまだ浅く、学校内では責任や負担のあまりない役割を担当している教師層、③女性、家庭に乳児が2人以上いる教師などのように、学校の仕事と家事や育児との両立に負担をもつ教師層であると報告している。また、神経症群が多発しやすい教師層は、女性、年齢20～29歳、年齢40～49歳、未婚者、経験年数2年未満、特殊学級の担任などであるという。

宗像らの報告は、女性は燃えつきやすく、神経症群が多いという結果である。女性は神経症的な症状を持って受診してくる率も男性に比べて多いが、今回の調査結果でも、男性に比べ女性の教職員のGHQ得点が高く、災害の影響も女性がより強く受けていると考えられる。

年々、教師に要求される仕事の量も質も増加し、忙しすぎる教育現場で、教師はストレスにさらされている。上畑(1992)らは、教員の職場ストレスについて研究し報告している。それによると、多い順に「時間に追われる」「仕事が多すぎる」「ノルマがきつすぎる」「人手不足だ」という項目に「いつも感じる」と答えており、いずれも男子よりも女子の指摘する割合が高くなっている。さらに仕事のストレスが日常の疲労状態とどのような関連にあるかをみ、

ストレスと自覚疲労徴候を得点化している。その結果をみると、意欲低下感は女子より男子が高いが、一般的疲労感、焦燥感、不安感、身体消耗感、蓄積疲労感は男子より女子が高い。上畑らの報告は、男性教師よりも女性教師の職場ストレスの高さを示している。女性教師は通常男性教師よりも多忙さを感じており、それがストレスとなり、症状を自覚させているという実態が考えられる。

(2) 災害体験とストレス

危険性を感じる者と身近な人をなくした者は、GHQ総得点や不安と不眠の要素点が有意に高く、また危険性を感じる者はうつ状態の要素点も有意に高い傾向にある。

女性で児童・生徒の父をなくした者のGHQ得点が非常に高い。男性に比べ女性は、身近な人をなくすことに強い反応を示している。なかでも、児童・生徒の父の死という痛切な体験によって引き起こされたストレス反応の大きさがうかがわれる。

財産・所有物を失った者のGHQ総得点および各要素点の得点が著しく高い。一方、男性で自宅を失った者、田畑や山林を失った者、仮設住宅での居住を余儀なくされている者のGHQ得点が平均よりも著しく低い。対象の人数が少ないため、統計的な解析はできないが、大きな喪失体験を持つ人のGHQ得点として、精神医学的な問題が示唆されるのではないかと考えられる。

(3) 教育活動とストレス

クラスに避難生活をしている児童・生徒がいる者、仕事量が増えた者、児童・生徒の生活面・行動面でマイナスの影響を感じる者およびプラスの影響を感じる者、学習面でマイナスの影響を感じる者がGHQ総得点や各要素点の得点が有意に高い。

Kyriacou, C. ら(1978)の教師ストレスについての研究によれば、全くストレスを感じない教師はわずか5%にすぎず、「かなり」と「極端」のストレスを経験していると答えた教師が20%に達している。教師の仕事がストレスの多いものであることが明らかとなっている。さらに、ストレスの源泉となるものは、「生徒の問題行動」「労働条件の悪さ」「時間が十分でないことによる圧力」「学校の雰囲気」の4つに大きく分かれている(齊藤, 1986)。

3章 精神保健への影響

教師にとって、児童・生徒の生活面・行動面の問題は、平常時においても、ストレスの源泉となるものである。長引く災害下において、児童・生徒の生活面・行動面での影響がみられることは、教師にとってより大きなストレスサーとなるものであろう。また災害下において、不安定な生活をしいられている親や家族にとって、子どもを安心して登校させられる学校と教師への信頼と期待は強いであろう。それに応えようとすることは、教師にとってはさらにストレスを強める要因となると思われる。

仕事量の変化および学習へのマイナスの影響を感じる者は、GHQ総得点および不安と不眠の要素得点が有意に高い。上畑らおよび Kyriacou らの報告にもみられるように、多忙で時間に追われる教師にとって噴火災害によってさらに仕事量が増加し、児童・生徒の学習に支障をきたしていると感じ、不安や不眠を強め、一般的な健康への影響として表れていると考えられる。

3節 二つの調査を実施して

児童・生徒に対する児童用顕在性不安検査（CMAS）と教職員への精神健康調査表（GHQ）の実施により、長期化した噴火災害下における子どもの不安と教職員のストレスの高さが明らかにされた。一方、これらの調査ではとらえることのできない精神医学上の問題の所在も示唆された。示唆された問題は精神医学的にはより深刻な問題ではないかと推測される。

日本では災害心理学や災害精神医学についての研究はまだあまり行われていない（安倍，1982．三宅，1993）。そのため基礎的な研究資料もなく、精神保健のための支援システムも用意されていない。被災者に対する支援システムや方法を持たないため、被災住民の苦難に満ちた状況をまのあたりにすると、自分の役割機能をどのように果たせばいいのか、行動しようとしても躊躇してしまう。今回の調査研究にあたって、筆者はそんな思いを抱いた。支援活動と調査研究を平行させたいと思ったが、支援のための方法がわからなかった。

老人、子ども、救援者などは「隠れた被災者」になりがちであるといわれる。子どもの教育にあたる学校関係者も被災地においては、特殊な立場におかれている。教師自身が被災していることもある。そのうえ、担当する児童・生

徒が近親死を経験し、家や財産を失い、ストレスの高い避難生活を余儀なくされていることがある。教師は被災した児童・生徒と特殊な接触を保ちながら、情緒的な支援や教育活動を続けていかなければならない。そこで今回、災害下における児童・生徒と教師という特殊な集合体を、一つのまとまりとして、被災の状況と精神保健への影響をとらえることにした。

従来、災害対策において精神保健対策は、生命や身体症状などの緊急性や重篤さに隠され、余分なものとして疎かにされがちであったように思われる。しかし、被災した人々が喪失体験を克服して、個人、家族、地域それぞれが持っている健全な力を引き出し、被災から立ち直っていくために、精神保健のためのサービスは災害対策の一環として重要な仕事である。

被災からできるだけ早い時期に、身体への影響の健康調査と平行して、精神健康についての面接やスクリーニング・テストを実施する必要がある。その結果をもとに、精神健康上の危険要因をもつ児童・生徒への個別的な対応を早期に開始し、長期にわたって継続していくようにする。親との死別による悲嘆、家や大事な物を失った喪失感、不自由な避難生活のストレス、将来の進路選択への不安など、被災の影響の強い児童・生徒への個別的なカウンセリングが提供できるような体制が望まれる。

今回、雲仙・普賢岳災害においては、教師は通常の教育活動に加えて、災害のために付随して生起してくる様々な問題に対処してきた。しかし、そのために、全般的な心身の健康に影響のあらわれている教師もいる。災害という危機状況における児童・生徒の精神保健のための支援対策がシステムとして確立されていく必要がある。

教師に対しては、災害心理学や災害精神医学から得られた情報を、教育資料として提供していくシステムの確立が要請される。災害に対する様々な心身の反応、喪失体験の経過と対応の原則、外傷性ストレス障害の容態や対処の仕方、精神保健のための社会資源の利用の仕方など、被災した児童・生徒の教育指導に必要な情報を効率的に提供していけるようなシステムである。

そのためには、災害が人間の心理にどう働き、どのような行動を引き起こさせるか、そしてそれは精神の健康にどのような影響を及ぼしていくのか、どのような精神保健上の支援対策が考えられるのかなど、災害心理学や災害精神医

3章 精神保健への影響

学は謙虚に基礎資料を積み上げ、実践を検証していく必要がある。

今回、二つの調査研究の機会を与えられたが、いまだに十分にフィードバックさせることができないままである。今回の研究結果が、今後、精神保健上の支援対策をたてるための資料として利用されていくことを期待する。

調査研究にご協力下さった島原市および深江町の児童・生徒、教職員、教育委員会の皆様に感謝いたします。

統計学的解析は長崎大学医学部精神神経科塚崎 稔先生にお願いしました。記して感謝の意を表します。

文 献

1. American Psychiatric Association: Diagnostic Statistical Manual of Mental Disorders (Third Edition-Revised) (1987). 高橋三郎訳 (1988): D S M-Ⅲ-R 精神障害の診断・統計マニュアル, 医学書院.
2. 阿部和彦編 (1982): 小児の問題行動と自覚症状, 金剛出版.
3. 安倍北夫 (1982): 災害心理学序説, サイエンス社.
4. 東 清和・小倉千加子 (1982): 性差の発達心理, 大日本図書.
5. Green, B.L., Korol, M., Grace, M.C. (1991): Children and Disaster: Age, Gender, and Parental Effects on PTSD Symptoms, J. Am. Acad. Child Adolesc. Psychiatry, 30(6): 945—951.
6. 加藤正明 (1985): 性差の社会精神医学 特集にあたって, 社会精神医学, 8(1): 1
7. 黒沢 尚・岩崎康隆 (1933): 災害時のパニック論, 日本医師会雑誌, 110(6): 719—722
8. Levitt, E. E. (1967): The Psychology of Anxiety, The Bobbs-Merrill Company, 西川好夫訳 (1976): 不安の心理学, 法政大学出版局.
9. 間宮 武 (1979): 性差心理学, 金子書房
10. 三宅由子・尾崎 新 (1993): 精神医学分野の災害研究の現状, 精神医学, 35(4): 399—405.

11. 宗像恒次・椎谷淳二（1988）：中学校教師の燃えつき状態の心理社会的背景，土居健郎監修：燃えつき症候群，金剛出版。
12. 村田豊久・堤 龍喜・皿田洋子・中庭洋一（1992）：日本版C D I の妥当性と信頼性について，九州神経精神医学，38：42—47。
13. 中川泰彬（1981）：質問紙法による精神・神経症状の把握の理論と臨床応用，国立精神衛生研究所。
14. Raphael, B. (1986)： When Disaster Strikes, How Individuals and Communities Cope with Catastrophe, Basic Books, Publishers, New York.
石丸 正訳（1988）：災害の襲うとき—カタストロフィの精神医学—，みすず書房。
15. 齊藤耕二（1986）：教師の精神衛生，前田嘉昭・岸田元美監修：教師の心理(1)，有斐閣。
16. 坂本龍生（1965）：児童用不安尺度の構成，高知大学学術研究報告，人文科学，14：161—166
17. 竹本泰一郎（1992）：雲仙普賢岳災害による学童の生活変化と健康影響について，平成4年度普賢岳噴火災害調査報告書。
18. 上畑鉄之丞（1992）：教員のストレスと健康，教育，11：23—36。
19. WHO（1992）： The ICD -10 Classification of Mental and Behavioural Disorders：Clinical description and diagnostic guidances. 融 道男・中根允文・小見山実監訳（1993）： I C D-10精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン—，医学書院。